高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.42

▲青柳裕介「やまももの詩⑩」／詩：「学校つぶれるな」安田・小川小３年　吉川邦洋（高知県こども詩集『やまもも』第５集より）

リレー随筆

「やまもも」三十年

上杉（うえすぎ） 美和（よしかず）

今年の一月一日から高知新聞紙上に「やまももタイムカプセル」というコーナーが設けられ、「やまもも」過去三十年の作品が毎日一編ずつ掲載されるようになった。そのためか、同紙の読者欄「声ひろば」には、これまでに増して「やまもも」への感想が多く寄せられるようになった。毎日を楽しみにされている方や、ご自身のエピソードを添えて懐かしがられている方など様々である。それは、高知の豊かな自然や、人々に温かく包まれながら、のびのびと生活したり、時には立派な働き手として家族とともに汗を流したりしている子どもたちへの心からの共感であり、最大の褒め言葉でもあると思う。

数年前のことである。学校に行こうかどうしようか揺れ惑う登校前の気持ちを綴った作品が応募されてきた。読んでいて苦しくなるような作品であった。作品選考会では、その作品を掲載候補に上げるかどうか、慎重に論議を交わした。その結果、発刊後予想される最悪の事態を考慮し、候補からはずすことにした。

子どもたちの綴る詩は、「やまもも」に多く見られるような明るく優しくユーモアに富んだものばかりではない。どうしようもない現実にもがき苦しむ作品だってある。実名掲載で不特定多数の手に渡る「やまもも」には載せられない作品もあることを痛感させられたできごとであった。

しかし、子どもにとっても、生きづらい今という時代、そういった作品こそ大事にされるべきであろう。それは、教育活動の最前線である学校・学級において教師と子どもとが織りなす学習によってなされることである。子どもが詩を書くという行為は、作品応募のためにあるのではない。何よりもその子ども自身の表現活動であり、子どもたちの心を結ぶ学習活動であることを心に刻んでおきたいものである。

創刊されて三十年あまり、「やまもも」は県民共有の財産に育てられ、全国にもその存在を知られるようになった。私たち高知県児童詩研究会は、「やまもも」の原点を再確認し、今という時代を生きる子どもたちの願いに応えられる児童詩教育を求め広げていきたいと考えている。

（高知県児童詩研究会・会長）

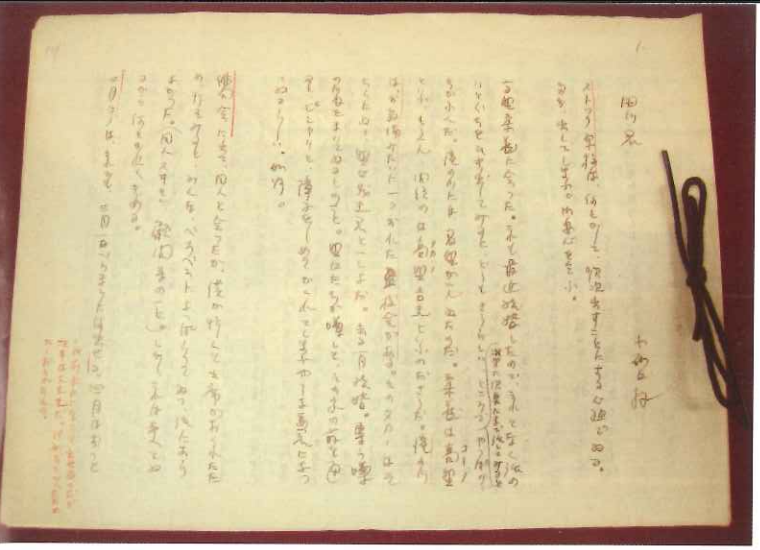
展覧会紹介 Exhibition

こどもはうたう ～『やまもも』30年の歩み～

平成20年
9月13日(土)
▼
11月3日(月)
企画展示室
観覧料350円

子どもたちの生き生きとした詩の世界にふれてください

高知県こども詩集『やまもも』は、高知県内の小中学生の詩を集めた児童詩集です。一九七七(昭和五二)年から毎年一冊ずつ発行され続け、今年で三二集となりました。昨年十一月、『やまもも』の編集にあたってきた高知県児童詩研究会が高知県文化賞を受賞しました。これを記念して、『やまもも』の世界を三〇年あまりにおよぶ歩みや時代背景とともにご紹介する展覧会を開催しています。



▲小砂丘忠義直筆の手紙／小砂丘忠義顕彰会所蔵

●児童詩の流れと『やまもも』の誕生

子どもたちが自分のことばで素直な思いを書く児童詩の歴史は、一九一八(大正七)年に創刊された子ども向け文学雑誌「赤い鳥」から始まりました。夏目漱石の門下の一人である鈴木三重吉が中心となって、子どもたちの作文や詩を募集し、また、子どもたちのための優れた童話や童謡を掲載しました。この雑誌で詩や童謡を担当したのが、近代日本を代表する詩人・北原白秋です。「ゆりかごのうた」「からたちの花」「この道」「ペチカ」など、今も歌いつがれる名曲を残し、児童詩の発展に大きな影響を与えました。

その後、高知県出身の小砂丘忠義(ささおかただよし)が、一九二九(昭和四)年に雑誌「綴方生活(つづりかたせいかつ)」を発刊。その中で、日々の生活の中にある事実を観察し、綴方(作文)に書くことで子どもたちの生活を高める教育を目指しました。この考え方は生活綴方運動として全国に広まり、小砂丘忠義は「生活綴方の父」と呼ばれることとなりました。

このような流れを受けて誕生したのが『やまもも』です。詩集発行のための発起人会開催を案内する文書には、「先人の後を継ぐ骨太い児童詩教育を根づかせたい」「何よりも子どもらしいすなおな目や心情を大切にしたい」と書かれており、これが『やまもも』の詩の世界の基本理念と言えます。

●優しさあたたかさにあふれる『やまもも』

『やまもも』は、発刊当初から注目を集め、一九八二(昭和五七)年には日本作文の会より第十七回北原白秋賞を受賞しました。その後も二〇周年、三〇周年を記念して発行された記念本がそれぞれ高知県出版文化賞を受賞するなど、その内容の素晴らしさが高く評価され、高知県に深く根づく子どもたちの詩集となりました。

▶高知県こども詩集『やまもも』第32集／高知新聞社刊

展覧会紹介

こどもはうたう ～『やまもも』30年の歩み～

平成20年
9月13日(土)
▼
11月3日(月)
企画展示室
観覧料350円

本展覧会では、『やまもも』の三〇年あまりにおよぶ歩みと、掲載された詩のうち三六編を第一集から第十集、第十一集から第二〇集、第二一集から第三二集の三つに分けて、パネルで紹介しています。時代背景のうかがえる詩や、子どもたちの優しさやあたたかさにあふれる詩をお楽しみください。

●青柳裕介さんの貴重な原画を展示中！

また、高知県を代表する漫画家の一人、青柳裕介さんが『やまもも』の詩をモチーフに描いた「やまももの詩」の原画を展示しています。『やまもも』創刊からのファンだったという青柳さんが自身で詩を選び、イメージを広げて独特のあたたかみあふれるタッチで描いた作品を、ぜひ、会場でご覧ください。

▶青柳裕介さんを紹介するコーナー

『やまもも』の詩は、どれも心に響くあたたかい魅力を持っていて、読んでいると笑顔になってきます。この機会に『やまもも』の詩の世界にひたってみませんか。どうぞ、お見逃しなく。

（学芸課／間城彩佳）

◆関連企画のご案内◆

会期中いつでも参加できます

■ぼくも『やまもも』！ きみも『やまもも』！

時　間：終日　午前９時～午後５時（入館は午後４時半まで）
場　所：高知県立文学館 2F　企画展示室
参加料：参加には当日の観覧券が必要です。（高校生以下無料）
内　容：ご自由に寄せ書きができるコーナーです。
『やまもも』に対する思いをみんなで書こう！

◎青柳プロダクション

■『やまもも』スタンプラリー

時　間：終日　午前９時～午後５時（入館は午後４時半まで）
場　所：高知県立文学館内
参加料：参加には当日の観覧券が必要です。（高校生以下無料）
内　容：文学館の館内にあるポイントをまわってスタンプを集めよう。
全部集めた人には素敵な商品をプレゼント！

■飛び出す『やまもも』～手作りフレーム～

開催日：平成 20 年 10 月 13 日(月・祝)、11 月 3 日(月・祝)
各日とも午後２時～午後４時
場　所：高知県立文学館 1F　文学館ホール
参加料：当日観覧券が必要です。
開催時間中ご自由に参加できます（所用時間約 30 分）
内　容：紙と布で簡単なフレームを作って飾りつけができます。
好きな言葉を書いてフレームに入れたら３Ｄで楽しむ『やまもも』のできあがり！

カッター・ハサミ・熱を発する器具を使用します。小さいお子様は保護者同伴でお越しください。

☆展示解説

日時：毎週日曜日　各日とも午後１時 30 分～（30 分程度）
企画展担当者が展示解説を行います。（要観覧券）

ムーミンの世界展
～ヤンソンさんからの贈り物～

7月19日(土)から8月31日(日)まで開催した「ムーミンの世界展～ヤンソンさんからの贈り物～」は、好評のうちに無事終了しました。展覧会の様子を簡単にご紹介します。

展覧会では、トーベ・ヤンソンの名作「ムーミン」シリーズをパネルとジオラマなどの立体的資料でご紹介したほか、関連企画としてフィンランドの食文化を高知女子大学文化学部の学生とともに調べ、実際に調理していただく料理教室やホテルディナーといったイベントも企画しました。

▲ディナーでは北欧の音楽の演奏もありました

また、展示を見ながらクイズを解く「ムーミン谷へようこそ！～ムーミンクイズ～」や、ヤンソンさんのムーミン作品以外の短編を楽しむ「朗読の会」の他、親子で楽しめる「親子で作ろう、ムーミンのポップアップカード」「スナフキンの帽子をつくろう！～わくわく花かざり～」など夏休みの宿題にもぴったりなイベントを開催しました。

▲スナフキンの帽子をつくろう！の様子

お客様からは「今回のムーミン展で、原作ひいてはフィンランドにも興味を持つことができました。」「ムーミン作品の背景などを知り、初めて〝ムーミン〟という作品を深く知ることができ、とても興味がわきました。」などといったお声がたくさん寄せられ、遠くは埼玉県や群馬県からわざわざ来館されるお客様もいらっしゃるなど、最終的には六千人を超える多くのお客様に楽しんでいただくことができました。展覧会開催にあたりご協力いただきました関係者の皆さま、ならびにご来館くださいました皆さまに心より御礼申し上げます。

（学芸課／福冨陽子）

© Moomin Characters™

学芸員メモ

「天璋院篤姫と宮尾文学」展　出会いを通して

「一日に七たび色がかわるという桜島の姿を、寅刻に仰ぐのは今日が初めてで、そしておそらく、これが最後になるであろうと篤姫は思いつつ、老女の幾島に手を取られて庭に下りた。」宮尾登美子作『天璋院篤姫』の書き出し部分。優美な桜島の描写とともに島津斉彬（第二八代薩摩藩主）の養女として将軍家に嫁ぐため、薩摩の江戸屋敷へ旅立つ日の篤姫の様子が、流麗な文体で紹介されている。この宮尾先生の小説『天璋院篤姫』が原作となった、ＮＨＫの大河ドラマ「篤姫」は、大変好評を博しているようだが、それに先駆け各地の文学館は、この作品を中心に展覧会を開催してきた。

昨年は、篤姫のふるさと鹿児島県鹿児島市のかごしま近代文学館で、今年になると、宮尾先生のふるさと高知の高知県立文学館、兵庫県姫路市の姫路文学館、北海道伊達市の宮尾登美子文学記念館、東京都世田谷区の世田谷文学館といった具合である。また、七月には、日本橋高島屋でも開催していただいた。色々な方との出会いに感謝しながら、これらの展覧会に携わる機会を得たが、『天璋院篤姫』の挿絵を描かれた画家の小市美智子先生との出会いも、今回の展覧会を通してであった。

小市先生が描かれた『天璋院篤姫』の挿絵原画は、各文学館で紹介され、最終的に高知県立文学館に寄贈されることとなった。昭和五八年、日本経済新聞夕刊に連載された三五二枚の貴重な原画は、小市先生の手元に大切に保存されていたのである。人と人との出会いを通して、宮尾先生の原稿と小市先生の挿絵が一堂に会した。作品が一段と輝きを増す瞬間である。

常設展「宮尾文学の世界」では、十二月末まで、『天璋院篤姫』を中心にご紹介しているが、来年早々には、小市美智子先生の他の作品とともに、この挿絵すべてをお披露目したいと考えている。

（学芸課／津田加須子）

常設展虫めがね 番外

寺田寅彦の貴重な資料を公開中！

今年生誕百三十周年を迎える寺田寅彦の直筆原稿三点（「空想日録」「試験管」「學位に就て」発表年順）が、七月末、当文学館に寄贈されました。いずれも、寅彦が晩年に用いた「吉村冬彦」の筆名で雑誌「改造」に寄せたもので、文の挿入、削除したあとが随所にみられます。なかには、四百字詰め原稿用紙の約半分にわたる改稿もあり、綿密な推敲の過程や、寅彦の几帳面な人柄を裏付ける、大変貴重な資料です。

▲「空想日録」（「妄想者の手記より」からタイトル改変か）
初出：「改造」1933（昭和8）年3月　改造社

今回は、原稿との異同を確認していただけるように、雑誌掲載時の複写（原寸大）を展示。また、そうそうたるメンバーが名を連ねる掲載号の目次からは、アインシュタインや円本ブームを巻き起こした雑誌「改造」の影響力をうかがい知ることができます。さらに、寅彦が装丁を手がけた初版本のうち、寺田家から寄贈された蔵書をご紹介しています。

直筆原稿は、私たちが普段目にする活字化された文章以上に、作家の熱を帯びた「息づかい」を伝えてくれます。そして、それこそが、資料の持つ圧倒的な説得力だと思います。十二月二六日（金）までの期間限定公開ですので、この機会をお見逃しなく。

（学芸課／森香奈子）

▲「學位に就て」
初出：「改造」1934（昭和9）年4月　改造社

※「改造」…1919（大正8）年創刊の総合雑誌。第二次大戦中の廃刊処分を経て、1955（昭和30）年までに全36巻、455冊を刊行。志賀直哉や久米正雄などの小説、河上肇らの論文や、海外からはバートランド・ラッセルなどを招待し原稿を紙面に飾った。

館長室から

「寅彦の原稿」

溝渕　良一

寺田寅彦の直筆原稿が当館に寄贈されました。その経緯は奇跡的ともいえます。雑誌の編集長が保管していた寅彦の原稿を、そのご遺族が「納まるべきところに」という思いで縁のある文化施設に託し、その文化施設が「寅彦なら高知に」ということで、当文学館に話がつながれてきました。

直筆原稿は保存状態が極めて良好で、流れるような筆致からは、今まさに推敲を終えた息づかいが伝わってくるようで、寅彦資料としては第一級の貴重な資料です。70年を余る歳月を経て日の目を見ること自体が希なことなのに、ご遺族の厚志、文化施設の英断と、思いもよらない頭の下がる出来事が重なってのことでした。目の当たりにすると、よく残っていたものだ、古書市場に流れなかったものだと、ありがたい思いでいっぱいです。

早々に寄贈手続きを進め、8月はじめ知事感謝状を携え、横浜に寄贈者を訪問しました。親しく懇談させていただく中、ビニール袋に入れられていた状態で捨てられようとしていたものを、編集長であった叔父の思いが詰まったものとして寄贈者が取り残したこと、「吉村冬彦」のペンネームであったため、後になって寺田寅彦の原稿と知ったことなど、その時のことを興味深く話していただきました。また、「原稿は作家のもの」「落ち着くべきところに落ち着いて大変うれしい」と言われた晴れ晴れとした表情が印象的でした。

今回のことでは、寄贈されたご遺族の関係者、文化施設、寺田家の皆さん、そして文学館と、皆喜んでいますが、県民の方々に喜んでいただくには、資料の展示はもとより、寅彦の研究、顕彰というこれからの取り組みが何より大切だと思います。

土佐文学さんぽ 40

ふるさとの山 ―ロマン・ロラン訳者 宮本正清―

猪野 睦

奈路から宮本正清というえらいフランス文学者がでていると聞いたのは、戦後しばらくたってだった。ロマン・ロランの「魅せられたる魂」の訳者だった。その奈路は根曳峠の登り口から左に折れて、領石川の支流をさかのぼった山あいだった。かつての長岡郡瓶岩村、いまの南国市である。

山にかこまれた奥づまりの集落であり、戦後は特産の桧笠づくりで知られていた。先日あらためてたずねると、近くに山を崩す石灰採石場があった。大型ダンプが通り、よそから入りこんだ人のモダンな住宅もふえていた。お宮と山の斜面の古くからの家を除いて集落は変っていた。

ここで宮本正清は明治三一年にうまれた。小さな弟や妹をおぶって通ったという尋常小学校をすむと、隣村の上倉白木谷高等へ一年通った。白木谷へは山越えだった。地図でみると直線距離四キロばかりだが、山越えでは七、八キロ、当時でいう二里近くではなかったか。途中に馬止という地名もあるから、かなりの難路を一時間半近くかけて通った筈である。いま崩している急峻な石灰山あたりからだった。毎日、草履を作ってはいた。

あと家で農業を手伝うなか叔父叔母に伴なわれ台湾へ渡った。台北中学から関西へ、そこから早稲田仏文学部へ入った。大正十一年からロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」訳を手がけ、昭和十五年からは岩波文庫七巻の「魅せられたる魂」をだすが伏字を強いられた。

戦時下、国家主義と軍国主義による反ヨーロッパ的な空気のなかで訳刊行は中断、戦争末期には京都で二か月に渡り憲兵に捕えられ、獄をでたのは敗戦の翌日だった。「魅せられたる魂」は、戦後、自由に改訳、全十巻ができ上ったのは昭和三〇年だった。戦時下にかいた詩に「ふるさと」がある。

つかれたたましいに　あせにまみれ　ほこりに
よごれたこころに　ふとうかぶは　山、山、
ふるさとの山　ちちのように、だまって　そっ
とだきしめてくれる　山はふかい愛とゆるしに
みちて　生きのたたかいのとしつきに　失われ
た童心のゆめをかえしてくれる　つかれた夫、
つかれた父のこころに

ふるさと奈路の山は生きていく力、大きな仕事への励ましであったろう。八四歳で没した。

（詩人）

▲宮本正清のうまれた奈路の風景

資料受贈報告

―最近の寄贈資料から―

『高知県こども詩集 やまもも30年 うたいつづけて』

高知県児童詩研究会 企画・編集・発行
二〇〇六年十一月　B6版　一九三頁

一九七六（昭和五一）年高知県こども詩集発行の企画が準備され、翌年一月詩集発行委員会が発足、六月に『やまもも』第一集が刊行されました。そして七八年一月「高知県児童詩研究会」を結成、七月には機関誌「やまもも通信」第一号も発行されて「研究会」の活動が本格的に始まりました。七九年には早くも『やまもも』第二集が、日本作文の会「優秀詩作品賞」を受賞。八二年『やまもも』第一集から第六集が「第十七回北原白秋賞」を受賞するなど早くからその活動は全国的に高い評価を受けてきました。『やまもも』は毎年一回発行され、九六（平成八）年に発行された二〇周年記念『こどもはうたう』は九七年二月第四一回高知県出版文化賞を受賞しました。このたび寄贈された『うたいつづけて』も二〇〇七年二月第五一回高知県出版文化賞を受賞しています。

この本は同年十月に「全国新聞社出版協議会」の「第二回ふるさと自費出版大賞文芸部門B最優秀賞」も受賞しました。また「高知県児童詩研究会」は、これら長年に亘る活動の功績により二〇〇七年十一月に「高知県文化賞」を受賞しています。

選詩集『うたいつづけて』は、第三〇集までの作品の中から「生きてきた時代がよく表れている作品」「家族との絆の温かさや小さな命にも心を通わせるやさしさにあふれる作品」「忘れられない作品」など八一編の作品が選ばれ収載されています。五集ごとに区切って共通するテーマによる見出しがつけられ、年表風の時代背景とともに詩の内容を更に際立たせています。全篇こども達の瑞々しい感性に溢れた心温まる詩集となっています。

（学芸課／島村長生）

受贈報告（平成二〇年五月～八月）　敬称略

▼高知ペンクラブ・「高知文芸年鑑二〇〇八年版　高知文芸年鑑編集委員会編　高知ペンクラブ」▼豊島未来・四国の自然をうたう　豊島未来編　現代短歌を考える会」▼西村光一郎・「ホワ物語　西村光一郎著　高知新聞社」▼谷口浩子・（創作集）草の葉　第五三集　馬酔木舎編　草の葉同人」▼香南市教育委員会・「岡本弥太第七回白牡丹祭　岡本弥太第七回白牡丹祭実行委員会編刊」▼市原麟一郎・「NHK民話の玉手箱　もぐらはつちのなか（紙芝居）市原麟一郎脚本・田所のりあき絵　市原麟一郎」他▼土佐学協会・「たまるか土佐がはみかえる　土佐学年報第2号　土佐学協会編刊」▼山本清水・「海将伝　中村彰彦著　角川書店」他▼ダイセン・「（CD）民話の里だより　市原麟一郎作詞・村岡まみ作曲　ダイセン」▼楠瀬兵五郎・「（歌集）乱礁　楠瀬兵五郎著　高知アララギ発行所」▼谷嘉亀・「（句集）蝉しぐれ　谷嘉亀著刊」▼大塚雅春・「（小説）日蓮　大塚雅春著　鳥影社」▼岩阪恵子・「清岡卓行論集成Ⅰ・Ⅱ　宇佐美斉・岩阪恵子編　勉誠出版」▼横田晴光・「青鞜　瀬戸内晴美著　中央公論社」他▼高知新聞企業・「（高知県こども詩集　やまもも30年）うたいつづけて　高知県児童詩研究会編刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

展覧会紹介

アメリカの絵本作家であり、園芸家としても人気の高いターシャ・テューダーをご紹介する展覧会を「ターシャ・テューダー展～コーギーコテージへ、ようこそ。～」と題して十一月十五日(土)から開催いたします。

ターシャの手作りの品々や、やさしい絵に囲まれた空間で心の休まるひとときを過ごしてみませんか？

Photo by Richard W.Brown

Photo by Richard W.Brown

ターシャ・テューダーは一九一五(大正四)年八月にアメリカ・ボストンで、設計技師であるウィリアム・スターリング・バージェスを父に、肖像画家のロザモンド・テューダーを母として生まれました。九歳の時に両親が離婚し家族の友人夫婦に育てられることになったターシャは、ユニークな教育を受け、すでに子ども時代から、「大自然に囲まれ、創作活動をしながら手作りの生活をすること」が夢となりました。

一九三八(昭和十三)年、二三歳の時結婚し、夫の姪をモデルにした『パンプキン・ムーンシャイン』という絵本を作りました。キャラコ布を表紙にはった見本を作ってニューヨーク中の出版社に持ち込みますが、すべて断られてしまいます。しかしターシャはくじけず、再び出版社へ持ち込み、絵本作家としてデビューを果たします。その後六〇年以上に渡って絵本を描きつづけ、世界中で愛される絵本作家の一人となっていったのでした。

本展覧会では、ターシャの絵本作家としての業績からライフスタイルまでをテーマごとにわけ、貴重な資料と写真パネルでご紹介します。

●ターシャの家へようこそ

ターシャは一九七一(昭和四六)年、五六歳の時、長年の夢を実現し、バーモント州で暮らし始めます。今年の六月に九二歳で亡くなるまで、十八世紀の農家を模した家「コーギトコテージ」で、十九世紀風の生活様式を愉しみながら暮らしてきました。このコーナーでは愛用のティーセット、直筆のレシピなどとともにターシャのライフスタイルをご紹介します。

●絵本作家 ターシャ・テューダー

ターシャはこれまでに数多くの絵本を世に送り出してきました。『Mother Goose』と、『1 is One』で、アメリカ児童文学の最高権威「コルデコット賞(オナー賞)」に二度も選ばれるなど、絵本作家として輝かしい足跡を残しています。このコーナーでは代表作の一つ『コーギビルのいちばん楽しい日』の原画や書籍などとともに絵本作家としての業績をご紹介します。

●魔法の時間

ターシャは様々な物を手作りしてきました。このコーナーでは、ターシャの手から生み出された愛らしい表情のマリオネットやバレンタインカードなど、魔法のような手仕事の数々をご紹介します。

その他にもガーデニングを愛する人のあこがれの的となっている庭や、ターシャのクリスマスを、愛用の道具や資料でご紹介するコーナーもありますので、ご期待ください。

(学芸課／島田美和)

© Tasha Tudor and Family 2008

ターシャ・テューダー展
～コーギーコテージへ、ようこそ。～

平成20年 11月15日(土)～12月25日(木)

場所：企画展示室
観覧料：500円
(常設展含)

関連企画として、クリスマスキャンドル作りやクリスマスリース作りなど楽しいイベントもたくさんご用意しています。お誘い合わせの上ぜひお越しください。

高知県立文学館ニュース　第四二号　平成二〇年十月十四日発行　〒七八〇-〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八-八二二-〇二三一　FAX〇八八-八七一-七八五七

高知県立文学館　カレンダー 9月～11月

企画展案内

こどもはうたう ～『やまもも』30年の歩み～

平成20年 **9月13日(土)～11月3日(月)まで**　午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室　◆観覧料／一般350円（常設展含む）

高知県に深く根をおろした児童詩集である『やまもも』の 30 年あまりにおよぶ歩みを、この秋にご紹介しています。（※会期中 休館日なし）

©青柳プロダクション

多彩な関連イベントを開催しています！ 詳細は2・3ページをご覧ください。

ターシャ・テューダー展 ～コーギーコテージへ、ようこそ。～

平成20年 **11月15日(土)～12月25日(木)まで**

◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室
◆観覧料／一般500円（常設展含む）

©Tasha Tudor and Family 2008

ターシャ展のご案内をしています！ 詳細は7ページをご覧ください。

イベント案内

高知県立文学館 第11回児童生徒文学作品朗読コンクール

朗読審査＆記念講演会

入場無料　一般公開

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、朗読コンクールを開催しており、今年で11回を迎えました。
今年も地区審査で選出された児童生徒が、県審査に出場します。
子ども達の素直な心で表現される朗読を、ぜひ、お聞きください。

すてきな講師の先生による記念講演会は14時20分頃から、表彰式・講評は15時30分から開催します！お楽しみに!!

会場：文学館ホール　日時：平成20年11月16日(日)13時～

朗読フェスティバル 2009

2009年 2月21日(土) 開催！

出演者募集中！

高知県立文学館では、ただいま「朗読フェスティバル 2009」の出演者を募集しています。朗読者として出演し、思い思いの朗読を披露してみませんか？

朗読すること―
それは
目で、耳で、声で、
文学を楽しむ
ということ。

●申込しめきり●
11月30日(日)

●募集要項●

参加資格： 個人・団体、プロ・アマチュアを問わず、県内で朗読活動を行っている方

募集人数： 12組 ※応募者多数の場合、厳正な抽選の上、出演者を決定します。

申込み： 「朗読フェスティバル2009」出演者募集のチラシ裏面の『「朗読フェスティバル 2009」出演申込書』に必要事項を記入の上、朗読作品の朗読箇所のコピーとともに文学館へ送付、またはご持参ください。

●個人情報の取り扱い●
募集に際してお知らせいただいた個人情報は適正に管理し、「朗読フェスティバル」の活動に関してのみ使用いたします。

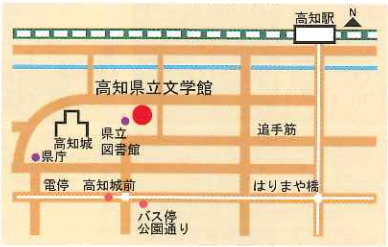
ご期待ください！
特別ゲストも予定しています！
詳しくはチラシをご覧ください。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。
観覧料	一般350円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail：bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●JR高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩５分
●バス停公園通り下車北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857